03-1　木曽保健所精神障がい者デイケアの現状と今後の方向性について

原菜々子、北原弘子、小板橋尚子、片桐志帆、熊井美桜、北原伊吹、西垣明子
（長野県木曽保健福祉事務所）

キーワード：精神障がい者、デイケア、45 年目、新たな居場所

要旨：木曽保健所の精神障がい者デイケアは昭和 53 年から開始され、令和 5 年度で 45 年目を迎えた。近年、参加者の固定化や新規参加者の減少が課題であったため、過去の経緯等を振り返り、今後の支援の方向性を検討した。参加者数減少の理由として、交通アクセスが不便なこと、参加者の年齢層の高齢化により若い年代が参加しにくいこと、関係機関への周知が十分でないこと等が考えられた。それらの課題に対応する運営方法や内容を検討し、今年度新たな取組を行う予定である。小規模町村で構成される当圏域においては、地域全体で居場所づくりに取り組んでいくことが重要と考えられた。

A. 目的

木曽保健所の精神障がい者デイケア（以下デイケア）は、昭和 53 年 6 月から開始された。同様の事業は県内 10 圏域で行われていたが、段階的に縮小され、平成 25 年度末をもって県事業としての予算化は終了した。木曽保健所では県内で唯一ゼロ予算で継続しており、現在は、週 1 回実施し、6 名が利用している。近年、参加者の固定化や新規参加者の減少が課題となっているため、新たな取り組みを行うにあたって現状と課題を明確にし、今後の方向性を検討した。

B. 方法

平成 30 年度から令和 5 年度（5 月末まで）の 5 年 2 か月の活動記録を用いて、参加者数の推移、平均年齢、居住地、紹介者、平均利用期間等の情報を一覧にまとめて比較した。また、町村デイケア開始や廃止の経緯について、町村保健師から聞き取りを行った。

C. 結果

（1）年度別・居住地別・新規参加者数の推移

年度別参加者は 6 ～ 10 名で推移していた。

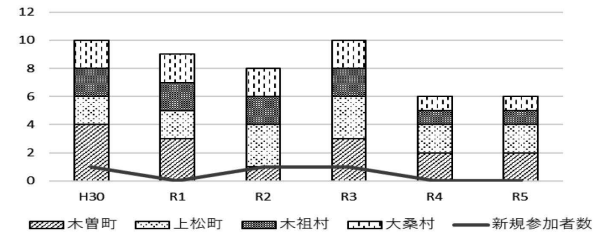

図 1　参加者数の推移

居住地別では、木曽町、上松町、木祖村、大桑村からは参加していたが、南木曽町、王滝村からの参加はなかった。新規参加者は毎年 0 ～ 1 名だった（図 1）。

（2）参加開始時の年齢と平均利用期間

参加者は実人員 13 名（男性 9 名、女性 4 名）、参加開始時の平均年齢は 35.6 歳（22 ～ 58 歳）で、20 ～ 30 代が 7 割を占めた（図 2）。

図2　参加開始時の年代

令和 5 年 5 月末時点の参加期間は最長 27 年、最短 1 年で、平均参加期間は 8 年 7 か月（中央値 6 年）だった（図 3）。

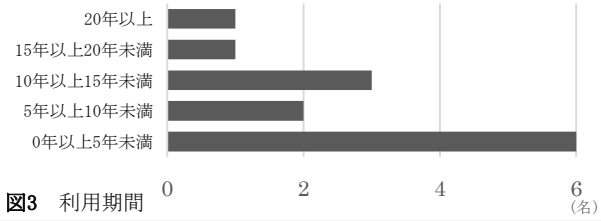

図3　利用期間

（3）参加のきっかけとなった紹介者

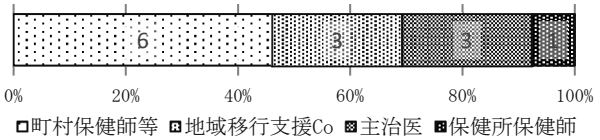

図4　紹介者

参加のきっかけは、町村保健師からの紹介が最も多く、次いで、障がい者総合支援センター職員、主治医からの紹介が多かった（図4）。

（4）年度別実施回数、平均参加者数

令和2～4年度は新型コロナウイルス感染症の影響で実施回数・平均参加者数ともに減少した（図5）。

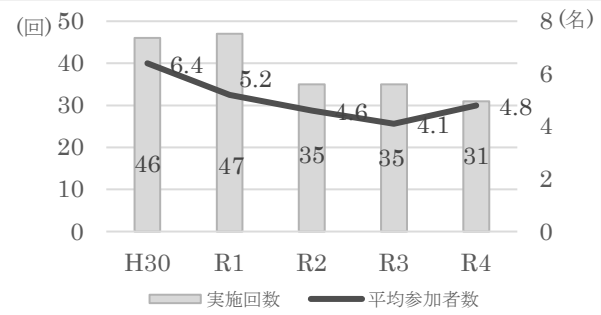

図5 実施回数と平均参加者数

（5）町村デイケアの実施状況

これまで5つの町村でデイケアが実施されていたが、現在も継続しているのは木祖村のみだった（表1）。廃止の理由として、送迎を担う役場職員や運営に携わる保健師の人手不足、参加者の減少の他、地域活動支援センター・グループホーム・作業所等といった新たな居場所ができたこと等が挙げられた。

	木曽町	南木曽町 大桑村	上松町	木祖村
開始	H16	H10	H18	H14
廃止	H24	H22	H27	継続中

表1 町村デイケアの開催状況

D. 考察

木曽は精神科病床が無く、精神科常勤医も不在で、デイケアを行う医療機関もない圏域である。

一方で、精神通院医療受給認定者は平成30年に278人だったが、令和2年には344人、令和5年には360人と増加しており、居場所のニーズは増えていると考えられる。

デイケアの参加状況等を調べたところ、参加開始年齢は20～30代が多く平均利用期間は8年以上だが、約半数は5年未満で利用を中止していた。

一方で、現在の参加者の平均利用期間は10年以上と長く、平均年齢は51.2歳であり、参加者の固定化と高齢化がみられたため、若い人が新たに参加しやすい運営方法や内容の検討が必要と考えられた。

また、デイケアへの参加のきっかけは、町村保健師、相談支援センター職員からの紹介によるものが多いことが改めて確認された。支援者から対象者に適切な情報提供を行って新規参加を促すためには活動の様子を知ってもらうことが重要であり、今後、支援者に向けたデイケア活動の報告会を実施予定である。

年度別実施回数は、新型コロナウイルス感染症の影響で令和2年度以降は例年の7割程度にとどまり、平均参加者数も5名を下回った。再開時には、「日中の居場所が無く困った」という声が聞かれ、デイケアの必要性が再確認された。一方で、他施設への通所等によりデイケア参加を中止する人もいた。

町村別の参加者は、会場に近い木曽町・上松町からが多く、会場が遠く交通アクセスが不便な南木曽町・王滝村からの参加者はいなかった。これまで、5つの町村でデイケア開催実績はあったが、小規模町村単独での開催は、人員等の理由から困難と考えられるため、令和5年度は、ＮＰＯ法人等と協働して木祖村、上松町、南木曽町に新たな居場所の設置を予定している。町村保健師や相談支援センターの担当職員も交代で運営に携わり、デイケア参加者を含め、心に悩みを抱える人が自由に過ごせる場を考えている。

今後、それらの事業効果についても検証し、地域全体で精神障がい者の居場所づくりに取り組んでいくことが重要である。

E. まとめ

現在のデイケアの課題を明確にすることで、新たな取り組みにつながった。

今後も精神障がい者が必要とする居場所づくりに地域全体で取り組んでいきたい。

F. 利益相反

利益相反なし。